《研究展望》

帝国の境界を越えて
―間−帝国史研究の現在―

山　田　智　輝

は　じ　め　に

本稿の目的は，イギリスの大学に所属する気鋭の研究者による最近の論考をとりあげ，「間−帝国史（trans-imperial history）」研究という，歴史学におけるひとつの新たな動向について紹介することである。ここで着目する研究者は，アレックス・ミドルトン（Alex Middleton），アーサー・アスラフ（Arthur Asseraf），およびバーニー・セブ（Berny Sèbe）の 3 氏である[1)]。

間−帝国史研究とは，日本でその理論および方法論的枠組みの構築・確立に向けてとりくんでいる水谷智の言葉を借りれば，「従来的な比較研究を超え」ることを意図して，「「帝国史」を「一帝国史」（「イギリス帝国史」「日本帝国史」等）の枠組から解放し，より世界史的な視座から」植民地主義を問わんとする歴史研究である[2)]。

複数の帝国をあつかう従来の歴史研究の主流は，異なる帝国を個別に研究したのち，鳥瞰的にそれらを比較することでそれぞれの特徴を描出するという比較研究であった。それにたいして間−帝国史研究は，植民地支配あるいはそれへの抵抗のための手段として歴史上の人物自身が比較をおこなっていたという点に着目し，比較を歴史研究の方法ではなく対象として主題化する。この新たな研究動向は，比較研究がもつ意義を決して否定するわけではないが，後者がややもすると諸帝国間の同時代的な相互影響関係への問いを看過しかねないという点を補完ないし克服し，よりクリティカルかつグローバルな観点から植民地主義の歴史を描こうとするものである。

こうした研究の火付け役として大きな役割をはたしたのが，1990 年代から英語圏の植民地研究を牽引してきた歴史人類学者のアン・ローラ・ストーラー（Ann Laura Stoler）である。彼女は，近代植民地帝国の特徴のひとつとして，それぞれの帝国がたがいを強く意識し，相互的な比較・参照をつうじて植民地支配を正当化したり，統治政

策を策定あるいは修正したりしていたことを指摘して，これを「比較のポリティクス」という概念として提示した。そして，「方法論の問題としてではなく歴史学の対象として比較を論じる」ことで「「比較のポリティクス」を歴史化する」必要があると主張した[3)]。

海外では 2010 年代なかばより，ストーラーの議論に呼応した研究が歴史学のひとつの分野として認識されはじめている。それを証するように，イギリスのオックスフォード大学にて 2014 年 9 月 29 日と 2016 年 7 月 8～9 日にそれぞれ *The Politics of Colonial Comparison* と *Imperial Comparison*，くわえてドイツのフンボルト大学にて 2017 年 9 月 15 日に *In-Between Empires : Trans-imperial History in Global Age* と題する国際ワークショップが開催されている[4)]。

以下では，具体的にどのような間−帝国史研究がおこなわれているのかをみていきたい。ただし本稿では，この新たな研究領域全体を包括的に論じるのではなく，おもに前述の 3 人の研究者による間−帝国史研究を紹介することにしたい[5)]。

1　19 世紀イギリス政治思想と帝国

前述のストーラーによる「比較のポリティクス」という概念を積極的に援用し，議会記録や書籍，新聞記事，定期刊行物，パンフレット等をおもな史料として，ヴィクトリア朝期のイギリス政治思想史を他帝国との関係性から再考しているのが，オックスフォード大学歴史学部講師のアレックス・ミドルトンである。

ミドルトンは 2015 年に，論文「イギリス帝国思想のなかのフランス領アルジェリア，1830～70 年」を発表した[6)]。この論文は，19 世紀中葉のイギリスが他帝国の植民地支配をいかにみなし，またそのことがどのような役割をはたしたのかについて検討することで，当時のイギリス政治のなかで「ヨーロッパ」と「帝国」というふたつのカテゴリがいかに連関していたかを分析したものである。そこでミドルトンは，1830 年のアルジェ侵攻から 1870 年の第二帝政崩壊までのフランスによるアルジェリア支配を事例としてとりあげ，つぎのように論じている。

第 1 に，19 世紀中葉のイギリス人政治家・思想家たちは，アルジェリアにおけるフランスの植民地支配がいかなるものであるかを理解しようとしていた。彼らは，複数の帝国からなる世界を前提としており，他帝国が抱えている問題は自帝国にもあてはまりうると認識していたのである。第 2 に，彼らはフランス領アルジェリアを植民地として

「失敗」とみなしていた。自国をフランスと対比させるイギリスの政治文化と深く結びつきながら，フランスのアルジェリア植民地支配体制は，非進歩的・無能・権威主義的・軍国主義的であると表象され，この見方をつうじて，イギリスのヨーロッパ大陸諸国にたいする差異意識が助長されていった。そして第3に，フランス領アルジェリアとの比較により，彼らはイギリス帝国の植民地支配は他帝国のそれよりも成功を収めていると認識した。その理由としては，イギリスの植民地は政府中央からの介入よりも人びとの熱意によって成り立っているという見解があげられた。そしてイギリス人は，フランス人とは異なり，植民地支配者としてふさわしい国民性を備えていると考えられた。すなわち，失敗とされたフランスによるアルジェリア支配は，たんに政治機構あるいは政策の問題であったのみならず，「国柄」の問題でもあったのである。

さらに2020年にミドルトンは，「ヨーロッパの植民地諸帝国とヴィクトリア朝期の帝国的例外主義」と題する論文を発表した[7)]。彼によれば，ヴィクトリア朝期のイギリス政治史・政治思想史にかんする研究は，近年きわめて活況を呈しているものの，依然としてイギリス国内史あるいはイギリス帝国の枠組みのなかで描かれる傾向にある。また，イギリス帝国の外に目が向けられる場合でも，過去のローマ帝国，あるいは同時代の清帝国やオスマン帝国，アメリカ合衆国との関係に焦点があてられてきた。そのため，イギリスとヨーロッパの他帝国の植民地主義が，いかなる影響関係のもとにあったのかは十分に検討されてこなかった。そこで本論文にて彼は，フランスのみならずオランダやドイツといったヨーロッパ大陸の諸帝国にも視野を広げ，19世紀イギリスの政治エリートたちが，これらの帝国における海外植民地の拡大と統治をどのようにみなし，自帝国と比較していたのかについて検討している。

ミドルトンによれば，当時のイギリスにおいて，植民地支配者として不適とみなされたのはフランスだけではなかった。オランダの植民地はフランスとは異なり独立採算が図られていたが，オランダ人は狭隘で排他的・商業的な精神にもとづいて植民地を搾取していると考えられた。いっぽうドイツ人は，植民地支配競争に乗り遅れたものの，植民地支配者としての適性を備えているとみなされた。しかし，イギリスとは異なり，ドイツは植民地で被統治者を軽蔑し暴力的にあつかっていると表象されたのであった。

イギリス帝国においてヨーロッパ大陸の諸帝国との比較をつうじて構築された思考様式の主流は，自帝国と大陸側の他帝国との差異を強調する「例外主義」であり，それは19世紀をつうじて一貫していたとミドルトンは指摘している。当時のイギリスの政治エリートたちは，自帝国と対置させるかたちで，それらの他帝国は後進的で暴力的，非

人道的であるなどと強調し，それによってイギリス帝国の正当性，あるいは植民地支配者としてのイギリス人の優越性を確認していたのである。ただし，他帝国の植民地支配にたいする否定的評価は，植民地主義体制それ自体への問題視では決してなかったことに注意を向ける必要がある。

以上のようにミドルトンは，19 世紀をつうじてイギリスの政治家・思想家たちは，自帝国とフランスをはじめとする大陸側のヨーロッパ諸帝国とを比較していたのであり，それによってこそ，大陸諸国との差異を強調する政治文化と帝国思想とが，たがいに関連しながら構築されていったと論じているのである。

2　20 世紀フランス領アルジェリアとパレスティナ・イスラエル

ところで，ミドルトンがとりあげたフランス領アルジェリアは，20 世紀に入ってからもイギリス帝国との比較がなされた場であった。このことをアルジェリアの文脈に即して検討しているのが，ケンブリッジ大学歴史学部講師のアーサー・アスラフである。

アスラフは 2019 年に，単著『植民地アルジェリアにおける電子的＝衝撃的ニュース』を刊行した[8)]。本書は，1881 年から 1940 年までのフランス領アルジェリアを対象に，実際には帝国あるいは植民地の境界を越えて移動することのなかった人びとが，メディアをつうじていかに世界を理解したのかについて検討・分析したものである。そこで論じられるのは，当時，各地で起こっていた出来事についての報道がなされるにつれ，植民地支配下にあったアルジェリア人たちは相互的関係性をより深めていったが，いっぽうでそれと同時に，ヨーロッパ人共同体とムスリム共同体とのあいだの分断がますます深まっていったということである。そしてアスラフは，新聞やラジオといった産業化されたメディアのみならず，市井やカフェでの人びとの会話，あるいは歌をつうじた情報の伝達という既存のネットワークをもあつかうことで，メディアにおける変化はナショナリズムの発露に起因するものであるという従来の見方に異議を唱えている。

ここでは本書全体をとりあげるのではなく，間−帝国史という観点からとりわけ興味深い，第 5 章「殉教国パレスティナ」に着目したい[9)]。他帝国の従属地域での出来事がアルジェリアでいかに報道され，それがいかなる影響をおよぼしたのかを主題とする本章において，アスラフはつぎのように論じている。

1930 年代のアルジェリアにおける報道では，「殉教者＝殉教国（martyr）」という言葉がしばしば用いられた。その語ともっとも結びつけられたのが，イギリス委任統治下の

パレスティナであった。アルジェリアにおいて「殉教者」とは，独立のためにフランスに抵抗して命を失った者をさすのが通例である。しかし 1930 年代になぜ，遠く離れた，しかもフランスではなくイギリスの統治下にあったパレスティナを形容するさいにその言葉が頻繁に用いられたのであろうか。それは，アルジェリアにとってパレスティナがなんらかの教訓を示していると考えられたからであった。そしてパレスティナが遠く離れた場であったからこそ，同地での出来事をつうじて，アルジェリアの人びとはみずからが直面する問題について認識あるいは再考することができたのである。

1929 年 8 月と 1936 年から 39 年にかけて，パレスティナのアラブ人たちが増加するユダヤ人移民，さらにはイギリスによる統治にたいして起こした大規模な反乱は，アルジェリアの人びとの耳目を集めた。ヨーロッパの帝国主義勢力による統治と入植者による植民地主義，ユダヤ人とムスリムの対立というパレスティナの構図は，アルジェリア人にとって，みずからがおかれた状況に類似していると感じられたのである。当初，パレスティナでの問題は，イギリスの帝国主義やシオニズム運動，ヨーロッパの反ユダヤ主義，あるいは資本主義に起因するなどと多様に解釈された。しかしやがて，アルジェリアのムスリムたちは，その問題の本質を植民地主義に見出だしていった。そして，宗主国たるフランスのみならず，植民地主義にもとづく世界のあり方それ自体に抵抗しなければならないと主張するにいたった。

すなわち，アスラフによれば，植民地支配下のアルジェリア人ムスリムたちは，パレスティナという他帝国の統治下にある地域を注視し，アルジェリアと比較することをつうじて，みずからの直面する問題はアラブ・ムスリム世界におけるヨーロッパ植民地主義の体系的な問題であると認識していったのである。

さらに，アルジェリアとイギリス統治下の中東地域との比較は，1930 年代のみならず，脱植民地化の時期においてもなされていた。そのことについて検討しているのが，2018 年に発表されたアスラフの論文「「新たなイスラエル」――植民地の比較と実現しなかったアルジェリア分割」である[10)]。

アスラフによれば，アルジェリア独立戦争末期，当時のフランス大統領シャルル・ド・ゴール（Charles de Gaulle）の側近アラン・ペイルフィット（Alain Peyrefitte）やフランス政府内のアルジェリア問題国務長官直属の調査任務局は，アルジェリアをヨーロッパ系住民および親仏的な現地住民からなる地域と独立志向の現地住民からなる地域とに二分する「アルジェリア分割構想」を立案・検討した。そのさい両者は，脱植民地化における地域分割の前例として 1921 年のアイルランド分割や 1947 年のインド・パキス

タン分離独立，あるいは複雑な脱植民地化過程の前例として 1960 年のキプロスの独立といった，イギリス帝国における事例に目を向けた。しかしなかでも，彼らが多大なる関心を寄せ，その分割構想の枠組みを支えることとなったのが，イスラエル建国をもたらした 1947～48 年のパレスティナ分割であった。というのもそれは，アルジェリアには総人口のおよそ 10% にあたる約 100 万人のヨーロッパ系住民が存在しており，政治的特権を有した少数の移住者たる彼らの処遇こそが根本的な問題であったことから，イスラエル・パレスティナの事例がアルジェリアの状況ともっとも類似していると考えられたためである。

当時のフランス政府にとって，イスラエルは「植民地」では決してなく，むしろ近代的でユートピア的な国家とみなされていた。いっぽう民族解放戦線側も，アルジェリアの現状を過去のパレスティナになぞらえていたという点ではフランス政府と同様であったが，彼らにとってイスラエルはまさに「植民地」であり，フランスがアルジェリアに「新たなイスラエル」を生み出そうとしていると非難した。分割構想はエヴィアン協定締結直前まで検討されていたものの，分離独立はとりわけ第三世界から大きな批判を浴びるであろうことをド・ゴールが懸念したなどの理由により，結局，アルジェリアは分割されることなく 1962 年 7 月に独立を迎えることとなった。

かくして，アスラフが論じているように，アルジェリアを分割して「新たなイスラエル」を建国するという構想は立ち消えとなった。とはいえ，植民地統治者が頻繁に用いてきた比較・参照という行為は，脱植民地過程の最終局面においても政策立案のための重要な手段であったのである。

3　20 世紀スペインからみたイギリス・フランス帝国

では，ここまでみてきた英仏ふたつの帝国は，ヨーロッパのそのほかの帝国からどのようなまなざしを向けられていたのであろうか。近年，この問題にとりくんでいるのが，マンチェスター大学人文学部上級講師のバーニー・セブである。

セブは，19 世紀後半から 20 世紀前半にかけてのイギリス・フランス両帝国において，アフリカの植民地化に関与した探検家や軍人，行政官といった帝国主義者たちがそれぞれの本国のメディアにおいていかに表象されたのか，というテーマを自身の研究の出発点としている[11)]。しかし近年では，それらふたつの帝国を比較史的観点から検討するにとどまらず，英仏両帝国とスペイン帝国との同時代的関係性にも研究の視野と対象

を広げている。その成果として彼が2019年に発表したのが，「植民地にまつわる模倣・競合・便宜主義――20世紀スペインがみたイギリス・フランスの「帝国プロジェクト」」である[12)]。

本論文でセブはまず，現在の歴史学において，トランスナショナルな歴史研究がますます隆盛をきわめているが，植民地支配者たち自身がナショナルな境界を越えてたがいをいかにみなしていたのかは検討されてこなかったと指摘する。そして，従来の帝国史研究では英仏という二大帝国のそれぞれが大きな位置を占めてきたのにたいし，それらふたつの観察者として，かつて「陽の沈まぬ帝国」と称されたスペインを俎上にのせる。それにより，これまで等閑に付されてきた，帝国の境界をまたぐ複雑で動態的な関係性が明らかになると主張し，つぎのように論じている。

1898年にアメリカ・スペイン戦争で敗北し，それにともない植民地の大部分を喪失して以降，スペインでは自国の将来や帝国の威信をめぐって議論が交わされ，イギリスとフランスというヨーロッパの二大帝国が参照すべき例であると考えられた。ここで注目に値する人物が，独裁政権を築いたフランシスコ・フランコ（Francisco Franco）と同世代に属し，また彼と同様にモロッコの保護領化の過程で名をあげた軍人で，のちに作家および歴史家となるトマース・ガルシア・フィゲラス（Tomás García Figueras）である。というのも彼は，英仏両帝国からもたらされる最新の報道を生涯にわたって博捜・整理し，それにもとづいて保護領モロッコの統治に従事するとともにアフリカでの植民地問題に積極的に発言することで，フランコ体制下スペインの政府内外で大きな影響力を有したからである。

イギリス帝国は，植民地ないしドミニオン諸国からの要求や圧力にうまく対処しつつ経済的に密接に結びつくことに成功しているとガルシア・フィゲラスは評価し，見習うべき例を提供しているとみなした。いっぽう第二次世界大戦前夜までのスペインにおいて，アフリカにおいて直接的な利害関係にあったフランス帝国にたいしては，両義的な反応がみられた。政府関係者のなかには，おなじラテン諸国の一員として「文明化の使命」を担うフランスに協調すべきと唱えた者もいた。しかしガルシア・フィゲラスは，直接の競争相手としての側面を強調した。スペインはフランスよりも北アフリカと文化的に親和的であると同時に植民地社会に寛容であると彼は主張し，後者による植民地主義は同化主義的で抑圧的であると非難した。そして第二次世界大戦時には，フランスにたいするスペインの道徳的優越性がますます強調されるとともに，北アフリカにおけるフランスの植民地を領有してスペイン帝国を再興する可能性をめぐり，ガルシア・フィ

ゲラスを中心として議論が巻き起こった。スペインにとって，第二次世界大戦は植民地の再編をめぐる絶好の機会に思われたのである。

しかし戦後，そうした修正主義的主張が具現化することはなかった。とはいえ，ガルシア・フィゲラスは依然として他帝国の動向に大きな関心を寄せつづけた。彼の注目をひいたのは，英仏それぞれがいかに帝国秩序の再編に対処しているかであった。脱植民地化の進むなかで，イギリス帝国がコモンウェルス，フランス帝国がフランス連合という新たな秩序のあり方へ移行していることを彼は評価し，スペインはいかに植民地を処遇すべきかを両国から学びとるべきであると訴えた。そして，スペインの北アフリカとの文化的親和性やフランスとの対立関係をかつては強調していたのにたいし，むしろヨーロッパ諸国の一員としての自国の側面を重視し，イギリスやフランスと協調することを主張したのであった。すなわち，ガルシア・フィゲラスの例が示しているように，比較の主体と対象が同一であったとしても，それをとりまく時代や状況の変化に応じて，比較をつうじて引き出される見解も変化しえたのである。

このようにセブは，20 世紀のスペインにおいても，他帝国の存在が強く意識されており，自国の利益を引き出すべく「模倣すべき例」,「避けるべき状況」あるいは「掴むべき機会」が絶えずうかがわれていたことを明らかにしている。そして，スペインという「周縁化された帝国」もまた，間−帝国的な影響関係のもとにあったと論じているのである。

お　わ　り　に

これまで部分的にみてきたように，19 世紀から 20 世紀にかけて，併存する諸帝国間の密接な相互影響関係のもとで植民地支配やそれへの抵抗は展開されてきた。そしてそのなかで，他帝国による植民地支配の理論と実践を比較・参照することが，帝国の統治者および被統治者の双方にとって根本的重要性を有した。間−帝国的研究はこの点に着眼しながら，それぞれの帝国を所与のものとするのではなく，諸帝国間の関係性を従来とは異なる角度から描きなおしているのである。

ミドルトンが明らかにしているように，19 世紀イギリスの政治家・思想家たちは，その政治文化と密接に関連しながら，他帝国との比較をつうじて自帝国の理念と優越性を謳い，みずからの植民地主義を正当化した。ただし，比較する主体も一枚岩では決してなかったことにも注意を払う必要がある。たとえば，本国の政治エリートと現場の植

民地行政官とはしばしば緊張関係にあった。また後者は，前者の掲げる理念ではなく他帝国における植民地支配の前例を参照することも少なからずあった。いかに彼らが異なる帝国とのあいだで植民地統治にまつわる知や技術を交流したのか。彼らにくわえて，みずからの帝国の政策やイデオロギーにかならずしも忠実ではなかった主体，たとえば宣教師や人道主義者，ジャーナリスト，あるいは学者たちは，いかにそれぞれの帝国における植民地統治の理論と実践を比較・参照したのか。さらには，とりわけ20世紀以降，国際的な組織が大きな役割をはたしていったなかで，いかに帝国どうしが対立すると同時に協同していたのか。こうした問題群も，間−帝国史研究のあつかう主題である[13)]。

さらに，異なる帝国を比較・参照した主体は，帝国の支配者のみにとどまらなかった。アスラフがアルジェリアの文脈に即して論じているように，帝国の被統治者もまた，自身の経験と別の帝国の被統治者のそれとを重ねあわせることで，みずからのおかれた苦境への認識を深めたり，植民地支配に抵抗していくための糸口を見出だしたりしていたのである[14)]。

また，セブが主張するように，従来の帝国史研究の大部分を占めてきた英仏という二大帝国のみならず，スペイン帝国をはじめとするそのほかの帝国を視野に入れることは，植民地主義の歴史をより複眼的にとらえるためにも不可欠である。そのためにも，本稿ではふれられなかったが，オスマン帝国，清朝やハプスブルク帝国といった王朝家産帝国，またアメリカ合衆国やロシア・ソ連といった，ヨーロッパの海外植民地帝国以外の帝国をも検討・分析の対象とすることが求められる[15)]。そして，英語圏で十分に論じられているとはいいがたい日本帝国を西洋の植民地帝国とともに一貫した視座から検討し，それらの関係性を追究することもきわめて重要な主題である[16)]。

ただし，帝国間の同時代的影響関係を強調するあまり，たんに比較の事例を抽出・集積したり，植民地支配下の暴力や非対称な権力構造を相対化したりすることは，間−帝国史研究の意図するところでは決してないということを最後に付言しておきたい。まず必要なのは，帝国どうしの可変的かつ錯綜した関係性や比較する主体の立場，さまざまな植民地的文脈の相異を考慮し，いかなる状況がそれぞれの比較行為を条件づけたのかを十分にふまえることである。そのうえで，植民地統治やそれへの抵抗にまつわる知や技術が，帝国間の比較をつうじてどのように生成かつ循環したのか，もしくはその知や技術の越境がいかに帝国権力によって意図的に阻まれたのか。あるいはまた，アスラフが検討した「アルジェリア分割構想」の事例のように，ある比較をつうじた知がなぜ結

果的には現実に影響をおよぼさずに終わったのか，といった問いを追究せねばなるまい。すなわち，ストーラーのいう「「比較のポリティクス」を歴史化する」こととは，歴史上の主体による比較行為がいかなる政治的意味合いをもったのかを歴史的文脈のなかに位置づけることなのである[17)]。

以上，ミドルトン，アスラフそしてセブという 3 人の研究者の仕事を中心に紹介しながら，間−帝国史研究という歴史研究における新たな動向について素描してきた。ところで筆者は，イギリス帝国史を専攻しており，彼らやストーラーの仕事から大きな刺激と示唆を受けてきた。こうした間−帝国史研究が提起する視角や論点をふまえ，戦間期の国際連盟下での委任統治制度にみられる植民地統治体制の国際化を主題として，イギリス帝国における植民地主義を他帝国との同時代的関係性に着目しながら追究することを今後の課題としたいと考えている。

植民地主義をそれぞれの帝国の問題としてとらえるのではなく，複数の帝国をおなじ俎上にのせて世界史的な同時代性のなかで問う，「間−帝国」――あるいは「貫−帝国」ともよびうるかもしれない――という視座から歴史を描きなおす試みは，まだ緒に就いたばかりであり，今後のさらなる発展が期待される。

注

1）筆者は，歴史研究者有志により運営されている歴史家ワークショップの「2019 年度若手研究者国際交流事業」による研究助成を受け，2020 年 2 月にイギリスにて，これら 3 人の研究者それぞれと学術的交流をおこなうことができた。この場を借りて，深く感謝申し上げたい。歴史家ワークショップの活動については，市川佳世子・中辻柚珠・山本浩司「歴史家ワークショップ――デジタル化時代における草の根的国際化」『歴史学研究』第 1000 号，2020 年，62−73 頁を参照。

2）水谷智「間−帝国史 trans-imperial history 論」日本植民地研究会編『日本植民地研究の論点』岩波書店，2018 年，218−227 頁，219 頁。

3）Ann Laura Stoler, ‘Tense and Tender Ties : The Politics of Comparison in North American History and（Post）Colonial Studies’, *The Journal of American History,* vol. 88, no. 3（2001）, pp. 829−865, p. 862. くわえて，Ann Laura Stoler and Carole McGranahan, ‘Refiguring Imperial Terrains’, in Ann Laura Stoler, Carole McGranahan and Peter C. Perdue（eds.）, *Imperial Formations*（Santa Fe : School of American Research Press, 2007）, pp. 3−42 も参照。

4）前者ふたつの国際ワークショップの主催者およびコメンテーターを務めたのが，ミドルトンとアスラフである。また，セブは研究発表者として *Imperial Comparison* に参加している。

5）間−帝国史研究の理論と方法について論じた文献としては，以下を参照。水谷「間−帝国史 trans-imperial history 論」；Daniel Hedinger and Nadin Heé, ‘Transimperial History : Connectivity, Cooperation and Competition’, *Journal of Modern European History,* vol. 16, no. 4（2018）, pp. 429−452 ; Satoshi Mizutani, ‘Introduction to “Beyond Comparison”：Japanese Colonialism in Transimperial Relations’, *Cross-Currents,* vol. 32（2019）, pp. 1−21.

6）Alex Middleton, ‘French Algeria in British Imperial Thought, 1830−70’, *Journal of Colonialism and Colonial History,* vol. 16, no. 1（2015）, n.p.

7）Idem, ‘European Colonial Empires and Victorian Imperial Exceptionalism’, in Willibald Steinmetz（ed.）, *The Force of Comparison : A New Perspective on Modern European History and the Contemporary World*（New York and Oxford : Berghahn, 2019）, pp. 164−190.

8）Arthur Asseraf, *Electric News in Colonial Algeria*（Oxford : Oxford University Press, 2019）.

9）*Ibid.,* Ch. 5, ‘Palestine the Martyr’, pp. 156−182.

10）Idem, ‘“A New Israel”：Colonial Comparisons and the Algerian Partition That Never Happened’, *French Historical Studies,* vol. 41, no. 1（2018）, pp. 95−120.

11）Berny Sèbe, *Heroic Imperialists in Africa : The Promotion of British and French Colonial Heroes, 1870−1939*（Manchester : Manchester University Press, 2013）.

12）Idem, ‘Colonial Emulation, Competition and Opportunism : A Twentieth-Century Spanish Perspective on the British and French ‘Empire Projects’’, *The Journal of Imperial and Commonwealth History,* vol. 47, no. 5（2019）, pp. 943−973.

13）間−帝国的視座から帝国間の協力と植民地統治にまつわる知や技術の伝搬を論じたものとしては，Volker Barth and Roland Cvetkovski（eds.）, *Imperial Co-operation and Transfer, 1870−1930 : Empires and Encounters*（London : Bloomsbury, 2015）があげられる。また，間−帝国史研究を標榜してはいないものの関連する研究として，おもにイギリスとイタリアの帝国主義を反奴隷制運動との関係性から論じた，Amalia Ribi Forclaz, *Humanitarian Imperialism : The Politics of Anti-Slavery Activism, 1880−1940*（Oxford : Oxford University Press, 2015）や，国際連盟の委任統治制度を主題として戦間期の植民地統治体制について論じた，Susan Pedersen, *The Guardians : The League of Nations and the Crisis of Empire*（Oxford : Oxford University Press, 2015）も参照。

14）被統治者による比較のポリティクスに焦点をあてた間−帝国史研究の一例としては，Satoshi Mizutani, ‘Anti-Colonialism and the Contested Politics of Comparison : Rabindranath Tagore, Rash Behari Bose and Japanese Colonialism in Korea in the Inter-War Period’, *Journal of Colonialism and Colonial History,* vol. 16, no. 1（2015）, n.p. がある。

15）たとえば，ドイツの植民地主義が他帝国，とりわけイタリアから大きな影響を受けていたことについて，パトリック・バーナードによる一連の研究を参照。Patrick Bernhard, ‘Borrowing from Mussolini : Nazi Germany’s Colonial Aspirations in the Shadow of Italian Expansionism’, *The Journal of Imperial and Commonwealth History*, vol. 41, no. 4（2013）, pp. 617−643 ; ‘Hitler’s Africa in the East : Italian Colonialism as a Model for German Plan-

ning in Eastern Europe', *Journal of Contemporary History,* vol. 51, no. 1（2016）, pp. 61–90 ; 'Colonial Crossovers : Nazi Germany and Its Entanglements with Other Empires', *Journal of Global History,* vol. 12, no. 2（2017）, pp. 206–227. さらに，日本，ドイツ，そしてイタリアの枢軸三国のあいだの帝国的連関について論じた，Daniel Hedinger, 'The Imperial Nexus : The Second World War and the Axis in Global Perspective', *Journal of Global History,* vol. 12, no. 2（2017）, pp. 184–205 も参照。また，アメリカ合衆国史をグローバルな間–帝国的視座から描きなおす研究の最新の成果として，Kristin L. Hoganson and Jay Sexton（eds.）, *Crossing Empires : Taking U.S. History into Transimperial Terrain*（Durham and London : Duke University Press, 2020）がある。

16）この主題にかんしては，日本帝国とイギリス帝国というふたつの「帝国のはざま」にあった台湾の植民地経験を世界史的脈絡のなかで問うた，駒込武『世界史のなかの台湾植民地支配——台南長老教中学校からの視座』（岩波書店，2015 年）を参照。また，同書が示す間–帝国史研究の可能性については，以下を参照。水谷智「駒込史学が広げる間帝国的な視座の可能性」『クァドランテ』第 19 号，2017 年，77–82 頁；駒込武「帝国のはざまを思考すること——書評への応答」『クァドランテ』第 19 号，2017 年，89–100 頁，とくに 92–94 頁。さらに，間–帝国史的な観点から日本帝国を検討した最近の研究としては，*Cross-Currents,* vol. 32（2019）上の 'Beyond Comparison : Japan and Its Colonial Empire in Transimperial Relations' と題された特集に収められた諸論文や，日系アメリカ人と日本帝国の植民地主義との関係性を追究した，Eiichiro Azuma, *In Search of Our Frontier : Japanese America and Settler Colonialism in the Construction of Japan's Borderless Empire*（California : University of California Press, 2019）がある。また，日本帝国とイタリア帝国との相互影響関係にかんしては，たとえば，ダニエル・ヘディンガーによる以下の研究を参照。Daniel Hedinger, 'Universal Fascism and Its Global Legacy : Italy's and Japan's Entangled History in the Early 1930s', *Fascism,* vol. 2, no. 2（2013）, pp. 141–160 ; 'The Spectacle of Global Fascism : The Italian Blackshirt Mission to Japan's Asian Empire', *Modern Asian Studies,* vol. 51, no. 6（2017）, pp. 1999–2034.

17）水谷「間–帝国史 trans-imperial history 論」，221–222 頁。